

優秀賞

あきちゃんからの手紙

横須賀市立田浦中学校三年

岸 彩 加

「やめてよ、こないでよ。」

そんな事をあきちゃんに言う日がくるとは、思ってもいなかった。

同じマンションの下の階に住むあきちゃんとの出会いは、私が幼稚園の年長の時だった。

その時あきちゃんは小学5年生で、私たちは毎日のように遊んでいた。あきちゃんは耳が聞こえづらかった。そのため、耳には大きな機械をつけていて、話しかけても聞き返される事がほとんどだった。その上、滑舌がものすごく悪かった。それでも私は、明るくて優しいあきちゃんが、本当に大好きだった。

そんな私に転機が訪れたのは、小学校に入学してからまもなくの事だった。私は毎日お昼休みの時間にはるばる6年のクラスからやってくるあきちゃんと、普通に仲良くしていたが、ある日、その様子を見ていた友達たちが口々にこう言ってきた。

「あ、見て、また障がいの人と仲良くしてるよ、気持ち悪い。」

そういわれるようになり、私はその時、はじめてあきちゃんが嫌ら

われものだということに気がついた。私が避けられるようになるまで、そう時間はかからなかった。私が昼食当番の時、お皿を皆に配っていると、「キヤー障がい菌がうつるからやだ。」と言われたり、酷い時には「障がいいくさくなるからちか寄らないで。」と言われる事もあった。

私は、あきちゃんが許せなかった。こうなってしまったのは全てあきちゃんなんかと仲良くしてしまったからなんだ、と深く後悔した。それからあきちゃんは何度も私のクラスに訪れ、明るく笑顔で私に話しかけてきた。しかし、私にはそれがたまらなく嫌だった。そんなある日の事だった。周りの子たちの視線と聞こえそうで聞こえてこないヒソヒソ話がイライラのピークに達した私は、とうとうあきちゃんに向けてこう叫んだ。

「やめてよ、こないでよ。」

あきちゃんが私のクラスにこなくなってから、数カ月が過ぎた頃、私は前のように友達にかこまれ、いつも通りの生活を取り戻していた。そんなときだっただろう、私の引っ越しが決まったのは。

引っ越し先は、当時の家から車で約二時間半かかる隣の県だった。せっかく仲の良い友達がたくさんできたのに、お別れなんていや

だ、と私は強く思っていた。

引っ越しのため、自分の部屋の片づけをしていた時、私の目にふと留まった物があった。それは、幼稚園の時にあきちゃんからもらった手紙だった。そこには、『あやちゃんは私の一番のお友達だよ、ずっと一緒にいようね。』と書いてあったのを今でも覚えている。あれだけ仲が良かったのにも関わらず、あきちゃんを避けるようになった事に対して、私はその時はじめて自分を最低だと思った。

引っ越しの前日、静まった部屋に“ピンポン”とチャイムの音が響きわたった。「はい。」と言いながらドアの方に向かった母がしばらくしてからこう大声を上げた。

「あやか、あきちゃんとあきちゃんママよ。」

予想してもいなかった。約数カ月間もの間、避け続けてきたあきちゃんに、合わせる顔などなかった私は、走ってトイレの中にかくれた。母が何度も私をトイレからだそうと呼びかけていたが、私は意地でもでようとしなかった。数十分後、トイレから恐る恐る出たら、もうあきちゃんやあきちゃんママはいなかった。玄関に寄ると、プレゼントのような箱の隣に、一通の手紙がおいてあった。母が、「あきちゃんがあなたにとって、すごく会いたそうにしていたのよ？」

と、私に目線を合わせていつていたが、私は聞こうともせず手紙をあけていた。あきちゃんからの手紙には、こう書かれていた。

『あやちゃんへ　今まで仲良くしてくれてありがとう。あきは、小さいころから耳とこの変な声のせいで皆からいじめられてたけど、あやちゃんだけは仲良くしてくれてうれしかったよ。そんなあきだけど、毎日を大切に、たくましく生きる事にしてるんだ。あやちゃんとの出会い、一生忘れない！　あきより。』

あの日から八年たった今も、あの頃自分が、どれほど最低な事をしたのか、忘れてはいない。そしてこの先も忘れる事はないだろう。

生まれつき、耳と声の障がいをもった少女あきちゃん。彼女は周りに何をされようと、誰よりも明るく元気に毎日を生きていた。

あの手紙を読んでから、一番大切な事は、*「誰もが平等に、そして助け合いながら生きる事」*だと思うようになった。一人一人が同じ人間として、支え合って生きていくべきだと思う。

今年二十歳になる彼女は、今どこで何をしているのかわからない。私を変えたあの手紙は、今でも大切に保管してある。